

民俗学の研究成果を取り入れた小学校歴史単元の開発研究 —一人々は妖怪をどう捉えてきたのか—

戸田善治¹⁾*・小関悠一郎²⁾・鏑木康平³⁾・大川遼馬⁴⁾・土屋 雅⁵⁾・遠藤 学⁶⁾
遠藤友博⁷⁾・井原三勇士⁸⁾・河村 将⁹⁾・小倉智浩¹⁰⁾・石橋 賢¹¹⁾

¹⁾千葉大学教育学部

²⁾千葉大学教育学部

³⁾千葉大学大学院・教育学研究科・修士課程

⁴⁾千葉大学大学院・教育学研究科・修士課程

⁵⁾千葉大学大学院・教育学研究科・修士課程

⁶⁾旭市立干潟小学校

⁷⁾香取市立小見川中学校

⁸⁾船橋市立三山小学校

⁹⁾松戸市立高木第二小学校

¹⁰⁾南房総市立白浜中学校

¹¹⁾市原市立加茂小学校

Unit Development of Elementary Historical Education Based on the Folklore Research : How do People Perceive “YOKAI”

TODA Yoshiharu¹⁾* , KOSEKI Yuichiro²⁾, KABURAGI Kohei³⁾, OHKAWA Ryoma⁴⁾,
TSUCHIYA Miyabi⁵⁾, ENDOH Manabu⁶⁾, ENDOH Tomohiro⁷⁾, IHARA Myuji⁸⁾,
KOUMURA Sho⁹⁾, OGURA Tomohiro¹⁰⁾ and ISHIBASHI Kenji¹¹⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

³⁾Graduate School of Education, Chiba University, Japan; Master Course Student

⁴⁾Graduate School of Education, Chiba University, Japan; Master Course Student

⁵⁾Graduate School of Education, Chiba University, Japan; Master Course Student

⁶⁾Higata Elementary School Asahi City, Japan

⁷⁾Omigawa Junior High School Katori City, Japan

⁸⁾Miyama Elementary School Funabashi City, Japan

⁹⁾Takagi Dai-ni Elementary School Matsudo City, Japan

¹⁰⁾Minamiboso City Shirahama Junior High School Minamiboso City, Japan

¹¹⁾Ichihara City Kamo Elementary School Ichihara City, Japan

本研究は、2022年大学院授業「授業研究（社会）」の実践報告であるとともに、大学教員、大学院生そして現職教員による、妖怪に関する民俗学等の研究成果を取り入れた小単元「妖怪は社会を『うつす』鏡」の開発研究である。江戸時代以前においては、雷や豪雨、台風といった自然現象など、当時の人々にとって不可解な出来事を理解、説明する為の存在として妖怪が信じられていた。江戸時代以降、妖怪は娯楽の対象としても捉えられ、すごろくやカルタなどの玩具に妖怪の絵が描かれ、また歌舞伎の演目や文学小説にも妖怪を題材にしたものが作られた。現代においては、アニメ「妖怪ウォッチ」に代表されるように、商業主義の考えから、妖怪がキャラクター化されている。このような妖怪の捉え方の変化の背景には、食料の収集が困難などの社会不安の中で、鬼などの妖怪が生まれたのだと理解されてきたものが、戦乱も少なくなり、食料の収集も比較的容易となり、学問も発達した。その社会の変容が、人々に心理的な余裕を与え、妖怪が娯楽としての意味合いも持つようになった。このような、人々の妖怪の捉え方の変化とその社会的背景を関連させた小学校歴史単元の開発を行った。

キーワード：小学校歴史学習 (Elementary Historical Education), 民俗学 (Folklore), 妖怪 (“YOKAI”),
妖怪のとらえ方 (How to perceive “YOKAI”)

*連絡先著者：戸田善治 ytoda@faculty.chiba-u.jp

1. はじめに

本稿は、大学院授業「授業研究（社会）」の継続的な実践報告であるとともに、大学教員、大学院生、そして現職教員による小单元「妖怪は社会を『うつす』鏡」の開発研究でもある¹⁾。千葉大学大学院教育学研究科授業として、社会科教室は、毎年、「授業研究（社会）」（半期、1単位）を開講してきた。2022年度は、小関悠一郎（歴史学）、戸田善治（社会科教育）の両名が担当した。2022年度の受講生は、修士課程2年生1名、修士課程1年生2名、千葉県内の公立小・中学校教諭6名の合計9名であった。

この授業では、受講生自身が教材研究を行い、小单元学習指導案（3～4時間程度）や授業資料、ワークシートを作成してきた。科目等履修生として本授業を履修している現職教員（長期研修生）は、小・中学校の教育課程、児童・生徒の実態、教育現場の研究動向と研究成果をふまえ、大学院生に適切な助言をしてきた。大学教員は、受講生の主体性を尊重しつつ、専門的立場から、教材研究、開発した小单元学習指導案の理論的・実践的意義についての指導を行ってきた。

検証授業は、千葉大学教育学部附属小学校・附属中学校において、隔年で検証授業を行うことを基本としてきた。本授業の最初の段階で、本年度は附属小学校で検証授業を行う年であること、平成29年度改訂の小学校学習指導要領・社会にこだわることなく小单元開発し検証授業にかけるとを伝えた。そして、受講生全員が自分が「授業研究（社会）」で取り組みたいテーマや取り上げたい社会的事象、開発してみたい授業等について自由に発表した。

初期の段階では、マスツーリズム、江戸時代の旅行案内書、道中記、妖怪、歌舞伎などが出された。受講生全員で意見を出し合った結果、コロナ禍での移動制限、アマビエ、妖怪ウォッチなど、時事問題、子どもの興味関心等の様々な観点からの意見が出されたが、最終的に、小学校6年生を対象として、妖怪をテーマとする歴史学習小单元開発を行うこととなった。

2. 「怪異」「妖怪」に関する先行研究

(1) 民俗学の研究成果を取り入れた社会科教育実践研究

社会科は、歴史学、地理学、経済学、政治学等のいわゆる社会諸科学と密接な関係がある。ある時はそれらを教育内容として、またある時は社会的な見方・考え方として、社会科はそれらの研究成果、研究方法論等を取り入れ、社会科教育に関する諸理論を構築するとともに、授業実践に反映されてきた。例えば、日本社会科教育学会は、『社会科教育辞典』（2000年、ぎょうせい）、『新版社会科教育辞典』（2012年、ぎょうせい）を刊行しているが、社会諸科学と社会科の関係について、以下のよう項目を設定している。

第3部 現代社会からの発信

第3章 社会科と関連諸科学

●心理学と社会科

- 地理学と社会科
- 歴史学と社会科
- 政治学と社会科
- 法学と社会科
- 経済学と社会科
- 社会学と社会科
- 民俗学と社会科
- 文化人類学と社会科
- 哲学・倫理学と社会科
- 国際関係論と社会科

（*この項目は『新版 社会科教育辞典』のみ）

しかしながら、社会諸科学の中には、社会科との関係性について、盛んに議論されているものと、そうとは言えないものがある。その背景には、中学校社会科の分野名、高校社会科あるいは地理歴史科や公民科の科目名が影響しているよう。

中学校では、いわゆる系統学習が始まった1955年版『中学校学習指導要領 社会』から、地理的分野、歴史的分野、公民的分野（一時期は、政治・経済・社会的分野であった）という名称であった。また、高校では、科目名は西洋史、東洋史、人文地理、時事問題からはじまり、日本史、世界史、人文地理、地理、政治・経済、倫理・社会、現代社会などであった。そのためか、分野名や科目名に表れている歴史学や地理学等の社会諸科学と比較すると、科目名や科目名に表れていない民俗学や文化人類学は、その重要性は指摘されつつも、相対的に、研究的関心が薄かったといえる。

そもそも、日本社会科教育史をひもとくと、社会科と民俗学は密接な関係にあった時期がある。日本民俗学の創立者の一人として高く評価されている柳田国男は、GHQ主導で日本に誕生した社会科に強い関心を持ち、社会科に対して様々の提言を行うとともに、小学校社会科教科書『日本の社会』（実業之日本社、1953年）を出版した。民俗学を基盤として彼の社会科論は「柳田社会科」とも呼ばれ、社会科解体論が主張されたり、脱イデオロギー時代のように社会科教育学界で、「成立時の社会科とは何だったのか」「『今』必要とされている社会科とは何か」が議論される時、日本型社会科のあるべき姿の一つとして、民俗学との関係性に注目して、研究され続けてきた²⁾。

『新版 社会科教育事典』では、民俗学について以下のような定義が引用されている³⁾。

民俗学とは、人々が行為として行い、知識として保有し、観念や規範として保持している事象である民俗を、一定の集団（ムラ）を単位に調査・分析し、集団の規制力でもって世代を超えて継承され（伝承）、時には時空を超えて伝えられた（伝播）生活文化の歴史的転回を明らかにし、それを通して現代の生活文化を説明する学問である。歴史研究のように過去に文字で記録された史料に基づき記録された時代を明らかにするのではなく、民俗を豊富に伝承している人々（伝承者）からの聞き書きによって民俗資料を蒐集・分析し、生活文化を究明する方法がとられた（『日本民俗大辞典』下巻）。

この定義から推察できるように、社会科において生活文化を歴史的に扱う単元では、民俗学の研究成果を取り入れた小学校歴史学習は何ら問題ないように思える。例えば、2017年に改訂された現行の小学校学習指導要領・社会では、第3学年の生活の道具について調べる学習や、第4学年の都道府県内の伝統や文化を調べる学習、第6学年の歴史学習で生活や文化について調べる学習などでは、民俗学の研究成果を取り入れることが可能であろう。第3・4学年の実践の中には、郷土に伝わる民話・伝承、妖怪にまつわる昔話など、民俗学の研究成果を取り入れた実践があった。これに対して、第6学年歴史学習で、妖怪等をテーマとした実践研究は、実際には行われているであろうが、社会科教育学会レベルでの研究を見つめることができなかった。

これまでの社会科教育実践研究において、民俗学の研究成果、特に妖怪に関する研究成果を取り入れたものは、珍しいものではない。それらを、妖怪という教材の位置付けに注目して整理すると、大きく二つに整理できる。

妖怪に関する研究成果を取り入れた第1のものは、妖怪そのものに社会科教材としての魅力を見出し、その魅力を活用し既存の社会科授業を活性化したり、現代的な課題を社会科に取り組み実践研究である。これらは、妖怪の魅力を社会科授業にどのように取り込むかによって、多様な実践研究として行われてきた。具体的には、以下のような実践研究がある。

- ①市川寛也「妖怪文化を活用したコンテンツツーリズムの開発に向けた基礎的考察—『モチーフ』から『ジャンル』への転回を見据えて—」『コンテンツツーリズム学会論文集』2巻, pp. 37-45, 2015
- ②高田知紀・近藤綾香「妖怪伝承を知的資源として活用した防災教育プログラムに関する一考察」『土木学会論文集H(教育)』Vol. 75, No. 1, pp. 20-34, 2019

①は妖怪を活用したコンテンツツーリズムを行っている地域の研究として、郷土の妖怪に関する民俗学の成果をまちづくりに活かそうとする取り組みを分析した研究である。東日本大震災以降、防災教育の重要性は高まり、社会科でも防災教育との連携が強化されてきている。②は、日本各地の人々が語り継いできた妖怪を、災害の誘発要因、災害の予兆前兆、災害状況の説明、災害の回避方法、災害履歴の伝承という5つの類型で語られていることを明らかにし、リスクの伝達装置としての妖怪伝承の構造を踏まえ、その対策を検討する「妖怪安全ワークショップ」へと結実させる防災教育実践研究となっている⁴⁾。

妖怪に関する研究成果を取り入れた第2のものは、人々の妖怪に対するまなざし、妖怪のとらえ方を通して、人々の生命観、自然観、畏怖の念、社会の見方・考え方、あるいは社会的背景を学習しようとする実践研究である。このような研究では、人々の価値観や見方・考え方に迫るための具体物として、妖精、精霊、神あるいは怪異と呼ばれる存在が教材として扱われる。その教材の一つが妖怪である。

- ③島津礼子「北海道における『アイヌ文化学習』の可能

性と課題—ESDの観点から—」『広島大学教育学研究科紀要』第三部第67号, pp. 71-79, 2018年

- ④孫美幸「沖縄の民話における『異人』たちと『多文化共生』—日本社会における多文化共生教育への示」『文教大学国際学部紀要』第30巻2号, pp. 19-34, 2020年

現在、漫画を原作とするテレビアニメ「ゴールデンカムイ」が放映されており、アイヌ文化に対する関心が高まり、アイヌ文化を学習する素材として「ゴールデンカムイ」が注目されている。③は神が謡った「カムイユカラ(神謡)」, 聖伝「オイナ」, 英雄叙事詩「ユカラ」などの詞曲や、「ウエペケレ」と呼ばれる昔話などを民俗学の研究成果を活用し、主に北海道において実践されている「アイヌ文化学習」の可能性と課題を検討したものである。④は「多文化共生」と「いのち」の視点を結ぶというテーマの本で研究してきた著者が、古代から多民族との交流がさかんであった日本の沖縄諸島の民話に着目した研究である。ここでは、民俗学で行われてきた民話研究の方法論を活用して沖縄諸島の伝統的な思想や民話に登場する千鳥, 月, 鬼, 乙姫, 厄病神等の「異人」の検討がなされている。この研究は、「異人」に着目し、「国家」, 「文化」, 「民族」などを根源的に考え、学習者のアイデンティティをふりかえるという多文化共生教育への提言研究といえる。

ここまで、民俗学の研究成果、特に妖怪に関する研究成果を取り入れたものを、妖怪という教材の位置付けに注目して、大きく二つに整理してきた。本研究は、上記の第1のものと第2のものを組み合わせた、民俗学における妖怪に関する研究成果を小学校第6学年歴史学習に取り入れた単元開発研究である。

(2) 「怪異」「妖怪」について

「妖怪」を素材とした小・中・高校の歴史授業としての小単元開発にあたっては、歴史学における「妖怪」(より広く「怪異」)の捉え方の変化も押さえておく必要がある。というのも、1970年代頃まで「妖怪」などの「怪異」は、近代化の過程において啓蒙・克服・排除されるべき対象として取り扱われてきていた。そうした視点に立てば、「妖怪」を教育現場で積極的に取り上げる必然性は見出しにくくなる。とりわけ、近世史では、1980年代頃まで本格的な研究対象とは見なされず、古代・中世史と比べて研究が停滞していたことが指摘されている。本小単元の開発において、江戸時代の人々の妖怪観をどうとらえればよいか議論の焦点となったのも、このことと無関係ではないだろう。

それでも本小単元開発で「妖怪」を取り上げたのは、「はじめに」でふれた時事的関心や子どもの興味関心といった観点⁵⁾のほか、特に1990年代以降、古代・中世史のみならず近世史においても、「怪異」に論及した歴史学的な研究成果が生み出されてきているからである。木場貴俊が指摘するように、「妖怪」などの「怪異」は、近世という時代の特質を明らかにする素材として再評価されるようになった。妖怪・祟り・亡霊・天変地異・憑霊・狐憑き・鬼神といった「怪異」に着目することで、当時(近世)の都市のあり方や文化構造・宗教的組織と

村や民衆との関係など、近世社会の様々な側面が論じられるようになったのである⁶⁾。それらの成果が通史的叙述に反映されるようになってきていること⁷⁾も木場が指摘する通りである。そこで上記のような近世史研究の動向も視野に、今次の「授業研究(社会)」では、「妖怪」をテーマとした小学校歴史学習の単元開発を試みることにしたのである。

ただし、日本の歴史を通して見た時に、近世は社会規模での「妖怪」に対する捉え方が一つの大きな転換を見せる時期であるように思われることに比して、歴史学研究では「近世という時代の特徴を明らかにするため、怪異というツールをどのように用いるのかは、いまだ試行の段階にある」と指摘されていることにも留意する必要がある(注3, 木場著書)。このことは、以下に見るように、「妖怪」を素材とした歴史分野の授業実践がまだ多くの蓄積を持ってはいないこととも関連性を持つように思われる。歴史分野の授業で「妖怪」をより魅力的な教材とするためには、歴史学における研究の段階をさらに押し上げるとともに、教材研究や授業実践の試みを一層蓄積していくことが必要な段階にある。

こうした現状から本研究では、小学校歴史学習における歴史単元開発であること、「怪異」「妖怪」を通じて多様な歴史的考察が可能であることを見据えつつも、あえて、人々の妖怪観の変化として恐怖の対象(古代・中世)から娯楽の対象(近世)へという、やや単純で一面的な構図を元に授業を構成することを試みた。近世において「妖怪」が表象化され、黄表紙・歌舞伎・浮世絵・かるたなど、娯楽の要素が強い媒体に登場して社会化することに着目して、子どもたちが時代の変化に気づききっかけにしようと考えたからである。

以上に述べてきたことから窺えるように、「妖怪」を通じて、より正確かつ効果的に時代の変化を学ぶには、歴史学・社会科教育学における一層の研究の進展が求められていると言えるだろう。本稿は、理解が不十分な面も多々あるが、そうした今後の発展のたたき台になればという思いを伴って編まれたものでもある。

4. 小単元「妖怪は社会を『うつす』鏡」単元計画

(1) 妖怪の教材化⁸⁾

妖怪とは人間では理解ができない、超自然的な事象のことである。このような妖怪は古くから存在し、人々と関わりを持っていた。しかし、妖怪に対する捉え方は時代と共に変化していた。この妖怪の捉え方については江戸時代以前と以後に分けることができる。

江戸時代以前では、人々は妖怪を畏怖の対象として捉えていた。当時の妖怪観として、妖怪は「凶兆」や神霊からの言葉を伝えるものであると解釈され、この頃の妖怪は目に見えない、いわゆる実態のないものであり、言葉で表現するものであった。妖怪に関する記録として、平安時代末期に成立した逸話集である『今昔物語集』27巻や鎌倉時代末期に成立した『長谷雄草子』の中にも鬼が登場し、『今昔物語集』27巻では人々が鬼を恐れている内容が書かれている話がある。

そのように捉えられる背景として、科学技術や学問な

どが発展していなかったという点や農作物の生産量が低く、戦乱などで安定した生活を送ることができず、心の余裕がなかった点が関わっている。さらに、科学や学問の未発達で、妖怪が生み出される要因としても大きく関係しているといえる。さらに、妖怪が生み出される要因として、閉鎖的な空間であったり、暗闇といった闇の空間の存在が挙げられる。このような要因が江戸時代以前では多くあり、人々が恐怖を感じていたといえる。

江戸時代以後では、それ以前とは異なり、妖怪が娯楽の対象として捉えられるようになった。当時の妖怪観を考える上で鳥山石燕の『図画百鬼夜行』と恋川春町の『其返報怪談』の2作品が重要になってくる。前者は妖怪を表象化し、図鑑のようにまとめた本である。これらの作品は、今まで言葉でしか表されていなかった妖怪を、表象化し、それを一冊の本にまとめるという点で画期的なものであった。後者は出てくる妖怪が自らを虚構の存在であると捉えている点がそれまでと違っている点である。また、『其返報怪談』は黄表紙本(草双紙の一つ。しゃれ、滑稽、風刺をおりませた大人向けの絵入り小説)であり、多くの人々に読まれることになり、世の中に広まっていった。これらに加えて、他にも歌舞伎の演目、浮世絵、かるた、手品など江戸時代には妖怪を題材にした様々なものが作られている。それにより、妖怪というものが多くの人々に親しまれるようになった。

妖怪が娯楽の対象として捉えられるようになった背景として、学問や技術が発展し、人々が分からなかった自然現象などを理解できるようになったこと、戦乱などがなくなり、農作物の生産量の上昇などで生活も豊かになったことで生活に余裕ができたことがあげられる。生活に余裕ができ、本などを読むことができるようになったことで、江戸に住む人々は「箱根からこっちに野暮と化け物はなし」といったことわざを作り、妖怪の存在を信じなくなっていったことがうかがえる。

しかし、娯楽とは別に妖怪を新たな側面で捉える人々も現れ始めた。それは妖怪を心のよりどころや心の支えとして捉えることである。その一例として「アマビエ」がある。「アマビエ」は疫病退散など人間に対して良い事を与えてくれるような存在であり、人々の心のよりどころとなる役割を持った妖怪も出現し始めた。江戸時代以前では、妖怪は「凶兆」といった人に対して悪い影響を与える存在であると捉えられていたのが、人に対して良い影響を与える存在でもあると捉えられるようになっていった。

妖怪の捉え方は畏怖の対象だったものが娯楽の対象にもなるなど変化していった。このような捉え方は現代社会の妖怪の捉え方として類似する点があるといえる。現在でもアニメや漫画など様々なものに妖怪が用いられ娯楽として楽しまれている。さらに、妖怪をキャラクター化させ、より多くの人に親しまれるようにもなった。その中で妖怪の書かれ方としては人に危害を加えたり、恐怖を与えたりと畏怖の面で書かれることがあり、江戸時代以前の畏怖対象として受け取られていた側面もいまだに残っているといえる。また、新型コロナウイルスが流行した際に、アマビエが取り上げられ、疫病退散を願うなど心のよりどころとされることもあった。このよ

うに、各時代における妖怪の捉え方は現在にも通ずるところがあるといえる。

以上のことから人々の妖怪に対する捉え方の変遷とその背景について学んでいくことで、人々の意識や社会の変化を理解することにつながると考えたため、妖怪を教材として選択をした。

(2) 事前アンケートについて

授業実践にあたり、授業を行うクラスの児童35名を対象に妖怪のイメージに関する事前アンケートを実施した。このアンケートの目的は、小学六年生の児童が妖怪という存在をどの程度認知し、どのようなイメージを持って

いるのか明らかにするというものであり、一時間目の授業が行われる約1週間前に対象クラスにて紙媒体で実施した。

現代において、「妖怪」と聞くと漫画やアニメなどのエンタテインメントジャンルに登場する妖怪の姿が想起されるのではないだろうか。1968年にアニメ放送を開始した『ゲゲゲの鬼太郎』をはじめとし、近年では『妖怪ウォッチ』がブームとなったことからそれらの作品で妖怪として描かれているものが、児童の妖怪のイメージにも表れてくるのではないかと予想した。

事前アンケートでは以下の5つの質問を設定した。

Q1 あなたの知っている妖怪をすべて教えてください。

Q2 あなたは妖怪と聞いて、どんなイメージを持ちますか？ 当てはまる言葉に3つまで○をつけてください。選択肢以外の回答は、その他の欄に書いてください。

優しい 怖い 気味が悪い 強い 弱い きれい きたない 明るい 暗い
うるさい おとなしい 可愛い わがまま いたずら好き 人なつっこい 素直
派手 地味 乱暴 ずるい その他（記述）

Q3 妖怪はどんなところに現れると思いますか？ 当てはまる場所に全て○をつけてください。選択肢以外の回答は、その他の欄に書いてください。

きれいな場所 きたない場所 明るい場所 暗い場所 うるさい場所
静かな場所 広い場所 せまい場所 都会 いなか その他（記述）

Q4 妖怪は、いつ現れると思いますか？ 当てはまる時間帯に全て○をつけてください。

①深夜 ②午前中 ③昼間 ④夕方 ⑤夜

Q5 ズバリ、妖怪はいると思いますか？ 以下の選択肢から1つ選んでください。

①絶対いる！ ②もしかしたらいる ③多分いない ④絶対いない！

選んだ理由（記述）

上記の各質問項目ごとに回答を整理したい。Q1（知っている妖怪）では、1人で多くの妖怪を回答している児童もいれば、そうでない児童もいた。その中で「からかさ小僧、ぬりかべ、ろくろ首、一つ目小僧、ざしきわらし、かっぱ、ゲゲゲの鬼太郎、目玉おやじ」については複数人から挙げられていた。その他にも多様な回答があり、現代の小学生においても妖怪に関して本やテレビなどから様々な情報を得ていることが分かった。予想していた『妖怪ウォッチ』など近年の妖怪アニメーションに関する回答はなかった。

Q2（妖怪のイメージ）では、一般的に怖い存在や人間にいたずらをする存在とされる妖怪も近年ではキャラ

クター化、アニメーション化がされ可愛らしく描かれていることも多い。そのことから児童が妖怪に対してポジティブなイメージも併せて持っているということを想定し、多様な20の選択肢を設定した。結果としては「怖い」（14人）「いたずら好き」（14人）「気味が悪い」（13人）の3つをクラスの半数程度の児童が選択しており、最も多かった。それらに続いたのは「暗い」（10人）「強い」（7人）であった。その他の回答には前述のものとは対照的な「いいことをしてくれる」というようなものもあり、妖怪はマイナスイメージだけではないことが分かった。

Q3（妖怪の現れる場所）の回答では「暗い場所」（25人）と「静かな場所」（23人）、「いなか」（22人）に○を

した児童が特に多く、続いて「きたない場所」(18人)「せまい場所」(13人)が多かった。「明るい場所」にはひとつも票が入らなかったことから暗く人目に付かない場所に現れるイメージであることがわかり、第1時の授業内において具体的な場所を聞いた際には、路地裏や廃校、ゴミ捨て場といった場所が挙がった。

Q4(妖怪の現れる時間帯)では、最も多かったのは「深夜」(27人)、続いて「夜」(23人)「夕方」(16人)の順で、「午前中」(4人)や「昼間」(9人)は少数であった。全ての時間帯に○を付けている回答があったことから、時間帯を問わず妖怪は現れると考える児童もいることがわかり、Q3での「暗い場所」に現れるというイメージからも、時間帯にすると夜～深夜となるという関連性が見えた。

Q5(妖怪は実在するか)では、「多分いない」(16人)と答えたのがクラスの半数で、「絶対いる！」(3人)と「絶対いない！」(3人)に回答したのはそれぞれクラスの1割であった。「絶対いる！」(3人)と「もしかしたらいる」(8人)の得票を合わせるとクラスの約4割であったことから、いないと考える児童の方が多いものの、いるのではないかと考える児童も一定数いることが分かった。

妖怪と一言で表しても、イメージする妖怪像が各児童で異なり、様々な意見が出た一方で、暗い、怖い、いないのではないかとといった半数以上の児童が共通して持っている妖怪観が事前アンケートから見て取れた。

事前アンケート 回答の抜粋

Q5「ズバリ、妖怪はいると思いますか？」

①絶対いると考えた児童

- ・いなかったら私たちはふつうにせいかつしていない
- ・家で自分ひとりなのにおもちゃが急に声をだしたりしたから

②もしかしたらいると考えた児童

- ・目げきじょうほうがあるから
- ・伝説はけっこうしんじるから

③多分いないと考えた児童

- ・見たことがないから
- ・今は科学でわかってきたけど「絶対(いない)」とは言えないから

④絶対いない！と考えた児童

- ・根きよが全くないから

(3) 小単元「妖怪は社会を『うつす』鏡」の単元構成

本単元では、過去の人々が妖怪をどのように捉えていたのかを知り、「妖怪とは一体どのような存在なのか」について考えを深める活動を中心に設定している。(実際の授業展開については、末尾の学習指導案を参照されたい)。

妖怪の捉え方は、時代によって異なる。江戸時代以前においては、雷や豪雨、台風といった自然現象など、当時の人々にとって不可解な出来事を理解、説明する為の存在として妖怪が信じられていた。第2時「昔の人にとって妖怪はどのようなものだろうか？」では、平安時代に成立した「今昔物語集」の漫画資料と、鎌倉時代に成立した「北野縁起絵巻」の絵画資料から、およそ1000年前の人々が妖怪をどのような存在と捉えていたかを読み取らせる活動を設定している。「今昔物語集」においては、人々が妖怪である鬼を恐れている場面、「北野縁起絵巻」では、菅原道真公の怨霊が雷神となって宮中清涼殿に雷を落とすという場面がそれぞれ描かれている。

江戸時代以降、一定の合理的知識が広まり、畏怖の対象とされてきた妖怪の存在が、娯楽の対象としても捉えられるようになる。すごろくやカルタなどの玩具に妖怪の絵が描かれ、また歌舞伎の演目や文学小説にも妖怪を題材にしたものが作られた。授業(2時限目)では、様々な種類の妖怪が描かれているカルタ、歌舞伎の写真から、およそ300年前の人々が妖怪をどのような存在と捉えていたかを読み取らせる活動を設定している。なお、本単元の対象は、小学校6学年の生徒である為、歴史学習の進行度合いから、○○時代という表記はせず、およそ～年前という表記をした。

現代においては、アニメ「妖怪ウォッチ」に代表されるように、商業主義の考えから、妖怪がキャラクター化され、メディアで多く取り上げられるようになる。妖怪の存在は、江戸時代から現代にかけて娯楽としての意味合いを強くもつようになったといえる。ここで注意しておかなければならないことがある。この事は江戸時代にも当てはまるが、人々は妖怪を娯楽としてのみ捉えていたわけではない。不安や恐怖は、どの時代の人々も共通して持っている感情であり、科学的合理的な知識が広まったとしても、人々は妖怪を多少なりとも畏怖の対象として捉えているといえる。

ある時代の人々の妖怪への捉え方を考える上で、社会背景を知る必要がある。およそ1000年前においては、戦乱も多く、食料の確保が困難で、学問も未発達であり、そのような社会不安の中で、鬼などの妖怪が生まれたのだと理解することができる。およそ300年前においては、戦乱も少なくなり、お米など食料の収集も比較的容易となり、学問も発達した。そのような社会の変容が、人々に心理的な余裕を与え、妖怪が娯楽としての意味合いも持つようになった。第2時「昔の人にとって妖怪はどのようなものだろうか？」においては、およそ1000年前からおよそ300年前に至るまでの社会の変化をパワーポイントの資料としてまとめ、妖怪の捉え方が変化した社会背景を理解させるよう努めた。そして、第3時「あなたにとって、妖怪とはどのような存在？」においては、「キャラクター化された妖怪・アマビエ」を教材とした。「妖怪・アマビエ」とは、江戸時代の妖怪であるアマビコが変化して生まれた妖怪であり、昔から疫病を収束させると信じられている。現代においては、この「妖怪・アマビエ」がキャラクター化され、話題となっており、その背景には新型コロナウイルス蔓延による社会不安があるだろう。本単元では、各時代における人々の妖怪の捉え方と、そ

表1 小単元名「妖怪は社会を『うつす』鏡」単元構成

授 業 名	目 標
第1時 「妖怪って何だろう？」	・妖怪とそうでないものとの違いを自分なりに捉えることができる。〈知識及び技能〉
	・妖怪に対して興味・関心を持ち、妖怪がどのような存在であるかを考えている。〈思考力、判断力、表現力等〉
	・周りの人の考えを取り入れながら自身の妖怪観と向き合うことができる。〈学びに向かう力、人間性等〉
第2時 「昔の人にとって妖怪はどのようなものだろうか？」	・江戸時代以前とそれ以後の妖怪観の変化を理解することができる。〈知識及び技能〉
	・昔の人が妖怪をどのように見ていたかを考えている。〈思考力・判断力・表現力等〉
	・昔の人にとって妖怪はどのような存在だったかを理解しようとしている。〈学びに向かう力・人間性等〉
第3時 「あなたにとって、妖怪とはどのような存在？」	・アマビエや菅原別館の事例を通して、現代における多様な妖怪を知る。〈知識及び技能〉
	・社会の変化に応じて、妖怪の姿も変化したことを理解することができる。〈知識及び技能〉
	・個人の妖怪に対する見方や考え方を自覚し、その背景を考えることができる。〈思考力・判断力・表現力〉
	・社会と妖怪の関係を他者と考えたり、個人の見方や考え方を自覚し、その背景を考えたりする活動に積極的に参加し、妖怪についての認識を深めようとする。〈学びに向かう力・人間性〉

の背景を考えさせるような活動を設定した。

単元全体を通して、各時代の妖怪に対する捉え方を知り、また生徒個人が妖怪の存在を捉え直すことができた。また、妖怪の捉え方と社会には大きな関係があることを理解した。

5. 小単元「妖怪は社会を『うつす』鏡」の実際

(1) 第1時「妖怪って何だろう？」

第1時は、それぞれの児童が持つ妖怪観を明らかにすることを目的とした。はじめに事前アンケートの結果の共有から個人の妖怪に対するイメージの思い起こしや、クラスメイトの妖怪のイメージの認知を試みた。後に第1時の学習問題である「妖怪って何だろう？」をもとに、妖怪の仕分け活動に入った。

妖怪の仕分け活動では、アマビエ・かっぱ・悪魔・神様・鬼・妖精の6種類を提示し、ワークシート上でそれらを妖怪か否かで分けさせ、「妖怪だと思った」「妖怪じゃないと思った」理由を記述させた。この仕分け活動では、まずは個人で妖怪かそうでないかを理由をつけて考えることで、児童自身がどのような線引きを持って妖

怪を捉えているのかということをはっきりすることを主に置き、さらにその仕分け結果をクラスで共有することで、別の視点でも妖怪という存在を捉えるということができると考え、取り入れた。ワークシートにおける児童の仕分け活動の傾向をまとめると以下の表のようになった。活動では一つの仕分け軸で妖怪か否かを考えた児童もいれば、一つ一つの対象に対してそれぞれを妖怪とするか否かと考えた児童もあり、仕分けのパターンとその理由は多様なものが挙げられていた。

多くの児童が、アマビエ・かっぱ・鬼を妖怪、それ以外の悪魔・神様・妖精を妖怪ではないと仕分けしていた。一方で全て妖怪、全て妖怪ではないと考える児童もあり、全て妖怪とした理由は「いるかどうかわからない存在で非現実的だから」、全て妖怪ではないとした理由は「そもそも妖怪がいるという根拠はないから。信じると怖くなるから。」というものが挙げられた。また、妖怪は「厄災」に関与しているといったような次回以降の授業につながるワードも児童から挙がってきた。

仕分け活動の後にまとめとして「あなたの考える「妖怪」とはどのようなものですか？」という問いを立て、改めて児童自身の妖怪観に向き合う活動を行った。それ

表2 妖怪仕分けワークシートに見られる「仕分け」とその理由の概要

妖怪か否か	名前	その理由
妖怪	アマビエ かっぱ 鬼	・本や図鑑で妖怪であると紹介されていたから ・日本のものだから ・怖いから 悪いものだから ・伝説
妖怪ではない	悪魔 神様 妖精	・外国のものだから ・優しいから かわいいから ・架空のいきものだから

※「その理由」の表記は、児童のワークシートから複数の児童が記述していた表現を抜き出し、作成者がまとめたものである。

その児童が自身の妖怪に対する印象や考え、今回の授業を通して変わったイメージなどを記述していた。その中でも、「妖怪は人間が想像してつくったものである/伝説上の生き物である」といったような実在するものではなく、人間がつくり出した存在であるという主旨の記述が最も多く、次には「怖い」という恐怖の対象であるという記述が多く見受けられた。

一方で、「はじめは怖いと思っていたけど、いい妖怪もいると思った」という妖怪に対する印象の変化を述べている児童も複数人いた。また少数ではあったが、妖怪の漠然としたイメージだけでなく、人間の商業活動との関わりや人知を超える何かであるといったような鋭い視点も散見された。事前アンケートや仕分け活動を通じ妖怪に対して興味・関心を持ち、自分なりに妖怪か否かを捉えることに加え、周りの児童同士やクラス内での意見の共通を通して自身の妖怪観と向き合うことができたワークシートの記述から読み取れた。

第1時 児童のワークシート抜粋

「あなたの考える「妖怪」とは、どのようなものですか？」

- ・伝説に残っていたり身近に感じるもの。そして人間に悪いえいきょうをあたえるもの。
- ・日本で生まれたでんせつ的な生き物。
- ・悪そうなイメージで、ひっそりとできそうなもの。今日この学習をしてどんなのが「妖怪」というのかをちゃんと考えられてよかった。
- ・「いるからこわい」とかではなく、妖怪がいることは何かをもたらすことだと思った。
- ・すぐそこにいるかもしれないし、いないかもしれない。そんな恐怖感を生み出すある種の人の考えで、商用利用される人の道具であり人のごらくであり、心を安心させる場所であり、伝説として語り継がれるであろうものです。

(2) 第2時 「昔の人にとって妖怪はどのようなものだろう」

第2時では、妖怪の捉え方の変化を1000年前と300年前という二つの時代に区切って行った。

まず、1000年前の妖怪観を知るための資料として『今昔物語集』27巻第13話の「安義の橋の鬼」の漫画を用いた。そこから当時の人々にとって鬼(妖怪)は怖い・恐ろしい存在であったことを読み取らせることを意図した。その活動を行った後、1000年前の人々がなぜ妖怪をそのように捉えているのかという背景を説明する際に「北野天神縁起絵巻」を用いて説明を行った。そこでは、昔の人たちは自分たちが理解できないこと(授業内では雷を例に説明)を合理的に考え、納得するために妖怪のせいにしたことを説明した。ワークシートのところに教員からの説明を基に自分の言葉でまとめさせようとしたが、うまくできず、教員が示した内容をそのままワークシートに写すことになってしまった。

次に300年前の妖怪観を捉えさせるために妖怪を題材

にして作られているかるたや歌舞伎の資料を用いた。ここでは遊びに使われるものや娯楽として楽しむものと読み取らせることを意図とした。その後、1000年前の妖怪観を捉える活動と同じようにそのように捉える背景を考えさせた。そこでは、まず自分なりに考える時間と教員がスライドに提示したヒントを基に考えた。その後、新たに生み出された妖怪として「アマビエ」のような人間に対して害を加える存在ではなく、疫病退散のようないい役割を持つ妖怪が現れ始めたことの紹介や鬼の姿が変化していったことを説明した。

以上のような素材を用いることで、昔の人々の妖怪観が畏怖のものだったのが楽しむものに変化していったことを理解できるだろう。また、そのような変化の背景についても理解できると考えた。

これらについて、児童の反応はどうだったかワークシートを基に分析を行った。

『今昔物語集』から1000年前の妖怪観について読み取る活動については「怖い」や「恐ろしい」と書いた児童はワークシートを回収できた33名中26名が読み取ることができていた。そのほかの内容でも「人を襲う存在」、「人に害を与える存在」といったことを読み取っている児童もいた。

300年前の妖怪観を捉えるための発問に関しては「楽しむ」や「娯楽」と書いた児童は33名中18名であった。そのほかに多くの児童は「妖怪の怖さをなくすため」や「妖怪を伝えるため」と書いている児童もおり、様々なものであった。その理由に関して、まず児童に考える時間を設けたが、歴史を学んでいなかったため300年前の社会的背景を考えることができず、予想で書いている児童が多くいた。また、ワークシート内では色を変えて書かれていないため、明確ではないが、途中で出たヒントを基にそこから考えられることをワークシートに書いている児童も多くいた。

まとめに関しては、妖怪観の変化についてまとめられた児童は33名中28名がまとめることができていた。まとめ方として「怖い」や「楽しい」といったワードを出して書いている児童や「1000年前から300年前にかけて妖怪の捉え方が変化した」といった変化について述べている児童など様々であった。多くの児童がまとめることができたこととしてワークシートにそれぞれの時代で当時の人々の捉え方をまとめていたためしっかりと理解することができたと考えられる。妖怪観の変化に加え、その背景までも一緒にまとめることができていた児童は4名いた。

第2時 児童のワークシート抜粋

- ・1000年前から、300年前になり時がたつにつれて、色々なことがわかり妖怪に対しての印象が大きく変化することがわかった。
- ・昔の人にとっての妖怪は、怖いものから楽しむものへと変化している。→社会背景も関係している。
- ・今日は昔から現在までの妖怪のイメージの変化を学んだ。今は、こわいようかいも、いいようかいもいるけど、生活の変化によって、イメージも変

化するというのはとてもすごいことだと思った。
・妖怪への考え方がガラッと変わったのは、昔は知らないことが多く、不安定だったが、近代はよゆうが生まれたから。

まとめに社会的背景を加えて書いている児童は300年前の妖怪観の捉え方でその理由について1000年前より社会が発展し、様々なことがわかってきたことをしっかりと記述してあり、理解ができていたと考えられる。

全体として、江戸以前（1000年前）と江戸以後（300年前）の妖怪観の変化を捉えることができている児童が多く、今回の学習目標を達成することができたのではないかと考えられる。

(3) 第3時 「あなたにとって、妖怪とはどのような存在？」

3時間目は、現代社会に生きる私達が妖怪をどのように捉えているか、について考える授業である。授業の流れとして、初めにコロナ禍でアマビエという妖怪がSNSで流行したことが分かる動画を見る。アマビエがどのような妖怪かを知り、社会の大きな変化の中で、人々が生み出した妖怪であることを理解する。その時代の社会によって、妖怪の姿が変化することを再度確認し、現代社会に生きる私達が妖怪をどのように捉えているかを考えるきっかけとしている。妖怪をどのように捉えているかを考える活動は、個人で行い、その後発表の時間を設ける。多様な意見を生徒の側から発表してもらい、妖怪は社会だけでなく、個人によっても捉え方が変わることを理解する。まとめとしては、妖怪は「社会を写す鏡」というキーワードを用い、社会の変化と人の心の変化によって、妖怪が生み出されること、であった。授業のまとめ後には、子どもの妖怪である座敷童が出ることで有名な菅原別館の動画を見て、妖怪はもしかしたら本当に出現するかもしれない、という解釈を生徒の中に残した。

ワークシートは、学習問題を記入する欄、学習問題に対する自分なりのまとめを記入する欄ともに、以下の四つの項目について、自由記述形式とした。

項目(1) 【なぜアマビエは、可愛いキャラクターになった？】

項目(2) 【あなたにとって、妖怪はどのような存在？】

項目(3) 【そう考える理由は？】

項目(4) 【3時間を通した授業の感想】

ここでは、項目(2)、項目(3)、項目(4)について、児童の目立った記述についての検討を行いたい。

項目(2)における児童の目立った記述は以下の通りである。

第3時 児童のワークシート抜粋・その1

項目(2) 【あなたにとって、妖怪はどのような存在？】

Nさん

色々な怖い妖怪から癒される存在のように時代と共に変わっていくような気がした。

A1さん

人間社会との関わりが大きいのに、人の前にあまりでない、はっきりしないもの。よく分からないもの。

Tさん

妖怪は人が自分の失敗を妖怪のせいにする事で自分の失敗を認めようとせずにすむようにする逃げ道を作る存在。

Kさん

ほとんど悪い印象の妖怪だけど、人々に良いことをしてくれる妖怪もいるから。妖怪は人に影響を与える存在だと思う。

S1さん

人間にとって、必要な存在だと思いました。

S3さん

妖怪はある時は怖かったり楽しかったり、そして最近はコロナから守ってくれる存在になっているため、人間の道具だと思えます。

本項目における回答は、大きく3つに分けられる。

- ① 妖怪のイメージやその変化に言及した記述
- ② 妖怪と人間との関係について言及した記述
- ③ よく分からない存在

①に関しては、Nさんのように、怖い存在から楽しい存在のような、妖怪のイメージやその変化に言及した記述や、優しい・いたずら好きのような妖怪の性格などに言及した記述が多くみられた。しかし、良い存在・悪い存在のような抽象的な回答も数多くみられた。②に関しては、S1さんのように、「人間にとって必要な存在」と表現する人や、S3さんのように、「人間の道具」と表現する人がいた。表現は多様であるが、妖怪と人間との関係の歴史を学んだ結果、各生徒が考えを深めることができたといえる。③に関して、よく分からない、理解できない、存在しない、などと回答した人も一定数いた。項目(3)における児童の目立った記述は以下の通りである。

第3時 児童のワークシート抜粋・その2

項目(3) 【(2)のように考える理由は？】

Nさん

怖いままだと売れなかつたりしてしまうし（アマビエのキャラクターの話）、世界に人気を残しているなら、可愛い存在の方が良いと思う。

Tさん

人が橋から落ちたのは、自分の未熟さが原因なのに、妖怪がでたといって、自分は失敗していないと他の人に伝えているから。（「今昔物語集」の漫画の話であると思われる。）

そして、アマビエは、自分たちが失敗し、コロナが広まったのはアマビエがいると自分たちは大丈夫だと思い、自分たちの失敗を認めていないから。

S1さん

何か悪いことが起きると、妖怪のせいにして、困ったことがあると妖怪に頼るからです。

妖怪がいないと、解決できない事件はたくさんある

と思うし、妖怪に人間が助けられたことはたくさんあると思うからです。

S3さん

時代によって捉え方が変わり、人々の都合の良いように存在が変わっているから。

項目(2)で、「②妖怪と人間の関係について言及した記述」の中で、Tさんのように2時限目に学んだ「今昔物語集」の内容に関連したのが見られた。これは、歴史を通して妖怪と人間の関係について考察を深めているものといえる。また、S3さんに見られるように、時代を通して妖怪のイメージが変化してきたことを理解し、その上で人間が妖怪をどのような存在として捉えていたかに関して考えを深めていた人も一定数いた。しかし、この項目に関しても、「怖いから」や「優しいから」「よく分からないから」など、単なる個人的なイメージで終わってしまっている生徒も何人か見られた。

項目(4)における児童の目立った記述は以下の通りである。

第3時 児童のワークシート抜粋・その3

項目(4) 【3時間を通した授業の感想】

A2さん

妖怪へのイメージや偏見など、自分が思っている妖怪とは違く、びっくりしました。そして、時代によって変化していくイメージが1000年前にはとても怖く、100年前には遊んだり歌舞伎にして楽しむ存在になっていたり、今ではキャラクターにして可愛い存在になっていたりして時代によってイメージが変化していることが分かりました。

Yさん

妖怪はいないと思っていたが、アマビエやざしきわらしなど良い妖怪はいてほしいと思った。300年前の「妖怪は楽しい！」という考え方は驚いた。妖怪の姿がガラッと変わるの面白かった。妖怪についてじっくり考えたことが興味深かった。

Fさん

私はこの授業を受ける前、妖怪は「負のイメージ」や「不気味なイメージ」しかなかったけど、二面性があるということがわかり、明るいイメージがつくようになりました。あと妖怪がいてほしいと思うようになりました。

S2さん

全ての授業を通して、改めて「妖怪」は時代・人の心が変わるとともに、妖怪の考え・イメージも変わるということを考えることができた。

本項目においては、A2さんやS2さんのように、妖怪のイメージの変化に関する記述が多くみられた。また、Fさんにみられるように、個人として妖怪のイメージが授業を受ける前と受けた後でどのように変化したか、に関する記述もみられた。本実践において、妖怪のイメージの変化を理解し、また個人としての妖怪観を明らかに

することが成果として挙げられたのではないかと考える。課題として、「妖怪はいない」と考える人へのアプローチが挙げられる。クラスの中で、「妖怪はいない」と考える人は数名存在したが、妖怪がいると信じている人達の状況を社会との関わりの中で考えさせることがあまりできなかったように思える。また、その他の課題として、怖い・優しい・楽しいなど、妖怪に対するイメージで完結してしまっている生徒が何名か存在し、妖怪が社会とどのように関係しているか、のレベルまで思考を高めることができなかったように思える。小学校6年生の、歴史学習が進んでいない段階の生徒に対して、いかに社会との関わりの中で、妖怪の存在を考えさせることができるか、が課題の一つである。

6. おわりに

2. (2)において、「民俗学の研究成果を取り入れた社会科教育実践研究」について大まかな整理を行った。しかし、「民俗学(妖怪)の研究成果と取り入れた(小学校)歴史単元の開発研究」というように、(妖怪)と(小学校)に限定すると、全く異なる側面が浮かび上がってくる。最後に、本研究のテーマでもある「民俗学(妖怪)の研究成果を取り入れた小学校歴史単元の開発」のポイントについて、特に妖怪を取り上げた研究に着目したポイントとそれを活用した類型化について述べておきたい。

第1のポイントは、前半部の「民俗学(妖怪)の研究成果を取り入れた」をどうとらえるかである。そのとらえ方には2通りが考えられる。1つは、「取り入れる」民俗学の研究成果をコンテンツベースの教育観における教育内容、教材としてとらえ、小学校歴史学習で学ぶコンテンツとして取り入れるものである。これを「コンテンツベース研究としての民俗学」と呼ぼう。これに対して、「取り入れる」民俗学の研究成果をコンピテンシーベースの教育観における資質・能力研究としてとらえ、小学校歴史学習で育成するコンピテンシーとして取り入れるものである。これを「コンピテンシーベース研究としての民俗学」と呼ぼう。

第2のポイントは、後半部の「(妖怪を)取り入れた小学校歴史単元の開発」を実際の教育実践にどう実現するかという開発研究の方法・結果である。1つは、既存の小学校歴史カリキュラムを前提として、それを崩さない歴史単元の開発を行うものである。これを「現状肯定研究」と呼ぼう。これに対して、既存の小学校歴史学習カリキュラムを前提とせず、新たな歴史単元の開発・提案、あるいは新たな小学校歴史学習カリキュラムを提案するものである。これを「提案開発研究」と呼ぼう。ここで留意すべきことは、現行の小学校歴史カリキュラムは、目標や学習活動ではコンピテンシーベースとしての性格を強めてきたが、内容はコンテンツベースとしての性格が、依然として強いことである。

これを図式化すると以下のように整理できる。

第I象限は、「コンテンツベース研究としての民俗学」と「現状肯定研究」を組み合わせたものである。これは、既存の小学校歴史カリキュラムの中に、それを崩さないように、既存の教育内容に合致した具体的な教材として

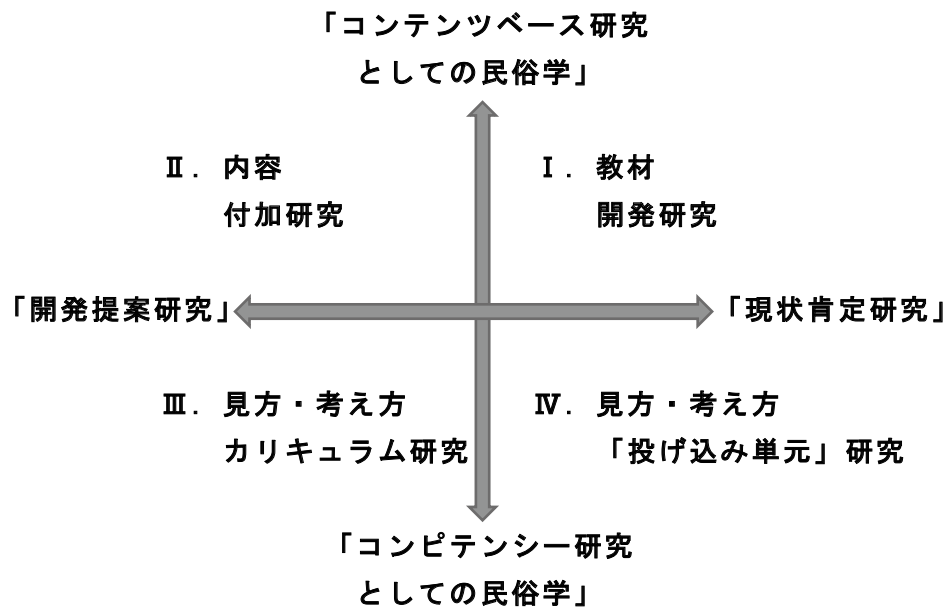


図1 「民俗学（妖怪）の研究成果を取り入れた小学校歴史単元の開発」の類型化

の妖怪を強調する研究になる。これを「I. 教材開発研究」と呼ぼう。教育現場で日常的に行われてい、いわゆる教材研究がここに該当しよう。現行の小学校学習指導要領では、小学校第4学年で地域の伝統文化を学習することとされており、各都道府県・市区町村ではいわゆる地域副読本の中で、昔から現在まで語り継がれている伝統文化が掲載されている。例えば、木更津市では、地域副読本の『わたしたちの木更津市』（令和年版）には、日本三大狸伝説の1つとして知られる「證誠寺の狸囃子」に由来する狸ばやしを踊る子どもの写真が掲載されており、地域の伝統文化の学習に取り入れられている⁹⁾。また、平安時代や奈良時代における百鬼夜行、江戸時代の貸本屋や絵草紙など、各時代の文化を学習する際に、その具体例として妖怪を取り上げることも可能である。

第II象限は、「コンテンツベース研究としての民俗学」と「開発提案研究」を組み合わせたものである。これは、既存の小学校歴史カリキュラムに、妖怪を新たな教育内容を付け加えることになる。これを「II. 内容付加研究」と呼ぼう。教育現場では、授業時数との関係上、教育内容の精選が求められている。また、近年のコンピテンシーベースの教育観の下で、子どもの主体的・対話的な活動がめざされていることも、年間指導計画を圧迫している。そのため、小学校学習指導要領・社会に妖怪が内容として明示されていないため、年間指導計画や授業時数配分の大きな変更が必要になる。実際には、第2象限の研究として行われたとしても、それはあくまでも研究者による理論研究であったり、教育現場で実践されるときは、後で述べる第IV象限の研究となる可能性が大きくなる。

第III象限は、「コンピテンシーベース研究としての民俗学」と「開発提案研究」を組み合わせたものである。たとえば、「歴史の捉え方」や「妖怪の見方・考え方」などのコンピテンシーをキーワードとして、妖怪を取り上げる歴史学習の開発がこれに当たる。そこで、これらを「III. 見方・考え方カリキュラム研究」と総称しよう。例えば、平安時代や奈良時代における百鬼夜行、江戸時

代の貸本屋や絵草紙など、各時代の文化を学習する際に、当時の人々の価値観、世界観、見方・考え方等にまで踏み込むことを単元目標の中核とする学習である。小単元「妖怪は社会を『うつす』鏡」のように、「見方・考え方」を中核と据えて複数の時期にまたがる単元開発をした場合、既存の小学校歴史カリキュラムに位置付けることができなくなる。ここに位置付く研究は、「小学校歴史学習の単元開発」とどまらず、「見方・考え方」を育成する小学校歴史カリキュラム開発研究に、現行の小学校歴史カリキュラムに対置する革新的なコンピテンシーベースの小学校歴史カリキュラム開発研究になる。そのため現行の小学校学習指導要領に縛られない研究開発学校等の研究や、大学研究者等による理念的研究になることが多い。

第IV象限は、「コンピテンシーベース研究としての民俗学」と「現状肯定研究」を組み合わせたものである。先にも述べたが、現行の小学校歴史カリキュラムは、目標はコンピテンシーベースとしての性格を強めてきたが、内容はコンテンツベースとしての性格が、依然として強い。また、現行の小学校歴史カリキュラムの中で、内容として妖怪は位置づけられていないし、教材として妖怪が取り上げられることは少ない。そこで、小学校歴史カリキュラムには位置付いていないが、試験的に検証授業を行う「投げ込み単元」を開発する研究である。そこで、これを「IV. 見方・考え方『投げ込み』単元研究」と呼ぼう。

本研究で開発した小単元「妖怪は社会を『うつす』鏡」は、「IV. 見方・考え方『投げ込み』単元研究」に位置付けることができる。大学研究者等が行う単元開発研究、授業開発研究の多くは、「III. 見方・考え方カリキュラム研究」を志向しながらも、「IV. 見方・考え方『投げ込み』単元研究」にとどまる研究が多い。われわれがこれまで「授業研究（社会）」において開発してきた授業・単元の大部分もまた、同様である。

民俗学の研究成果を取り入れた社会科授業などは特に

珍しいものではない。しかし、民俗学の研究成果を取り入れた（小学校）歴史授業、民俗学（妖怪）の研究成果を取り入れた（小学校）歴史授業開発・単元開発になると、社会科教育に関わるもの全員の研究を妨げているものがあるのではないだろうか。現行の小学校歴史カリキュラムは、目標はコンピテンシーベースとしての性格を強めてきたが、依然として、内容はコンテンツベースとしての性格が強い。小学校歴史カリキュラムがそのような現状であることとともに、我々の小学校歴史カリキュラムの捉え方、それに対する見方・考え方自身がコンテンツベースから脱却できず、コンピテンシーベースのままだからではないだろうか。

【注】

- 1) 大学院授業「授業研究（社会）」の継続研究の成果として以下のものがあげられる。
 - ・小関悠一郎ほか「歴史人物の学習を通して『歴史のとらえ方』を考える単元開発研究—義民・佐倉惣五郎を事例として—」『千葉大学教育学部研究紀要』第70巻, pp. 337-351, 2022年
 - ・竹内裕一ほか「“postコロナ”時代における小学校社会科授業—オンラインを活用した『主体的・対話的で深い学び』の可能性—」『千葉大学教育学部研究紀要』第69巻, pp. 239-248, 2021年
- 2) このような研究の代表的なものとして、以下の研究があげられる。
 - ・高田賢「柳田社会科教科書成立の背景」日本社会科教育学会編『社会科教育研究』第37号, pp. 1-10, 1976年
 - ・谷川彰英「初期社会科の目指したもの—教科書観から見た—」全国社会科教育学会編『社会科教育論叢』第34集, pp. 29-38, 1986年
 - ・谷川彰英「『社会科』存立の可能性—柳田国男の民俗学の視点から—」全国社会科教育学会編『社会科教育論叢』第41集, pp. 2-9, 1994年
 - ・溜池善裕「柳田国男の郷土研究における『公民』の意義—戦後の社会科教育論への萌芽の観点から—」日本社会科教育学会編『社会科教育研究』第66号, pp. 30-45, 1992年
 - ・小国喜弘「戦後社会科における民俗学的方法の位置—都丸十九一における『村がら』の認識をめぐって—」日本教育学会編『教育学研究』第61巻第2号, pp. 149-157, 1994年
- 3) 伊藤純郎「民俗学と社会科」日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』ぎょうせいpp. 388-389, 2012年
- 4) 国土交通省は、「きみの街にひそんでいる！気をつけ妖怪図鑑（動画）」をHPにアップし、主に若年層を対象に、身近な地域の水害リスクを認識させるための啓発活動を行っている。
<https://www.mlit.go.jp/river/bousai/education/index.html>
- 5) 議論を通じた受講者の意見については、以下の「3. 妖怪の教材化」も参照。
- 6) この点に関しては、以下の文献を参照されたい。
 - ・木場貴俊『怪異をつくる：日本近世怪異文化史』文学通信, 2020年
 - ・横田冬彦「城郭と権威」（『岩波講座日本通史』11巻, 1993年
 - ・吉田伸之「近世前期の町と町人」五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民』山川出版社, 1993年
- 7) この点に関しては、以下の文献を参照されたい。
 - ・吉田伸之『日本の歴史17 成熟する江戸』講談社, 2002年
 - ・倉地克直『全集日本の歴史11 徳川社会のゆらぎ』（小学館, 2008年）
 - ・若尾政希「享保～天明期の社会と文化」大石学編『日本の時代史16 享保改革と社会変容』吉川弘文館, 2003年
- 8) 本節で行っている妖怪に関する教材研究は、以下の著書に依拠している。
 - ・香川雅信『江戸の妖怪革命』株式会社KADOKAWA, 2013年
 - ・小松和彦『妖怪学新考：妖怪からみる日本人の心』小学館, 2000年
 - ・木場貴俊「17世紀前後における日本の「妖怪」観—妖怪・化物・化生のもの」小松和彦編『怪異・妖怪文化の伝統と創造—ウチとソトの視点から』国際日本文化研究センター, pp. 145-161, 2015年
 - ・吉田伸之『日本の歴史17 成熟する江戸』講談社, 2002年
 - ・倉地克直『全集日本の歴史11 徳川社会のゆらぎ』小学館, 2008年
 - ・若尾政希「享保～天明期の社会と文化」大石学編『日本の時代史16 享保改革と社会変容』吉川弘文館, 2003年
- 9) 木更津市の副読本である『わたしたちの木更津市』（令和3年版）は、以下のサイトで見ることができる。
<https://www.fureai-cloud.jp/kisarazu-manabi/attach/get2/1337/0>

民俗学の研究成果を取り入れた小学校歴史単元の開発研究

第6学年 社会科学習指導案

令和4年7月14日(木) 展開3時間目
千葉大学教育学部附属小学校 6年1組
授業者 鍋木 康平

- 第3時 「あなたにとって、妖怪とはどのような存在?」
- 目標
 - ・アマビエや菅原別館の事例を通して、現代における多様な妖怪を知る。 <知識及び技能>
 - ・社会の変化に応じて、妖怪の姿も変化したことを理解することができる。
 - ・個人の妖怪に対する見方や考え方を自覚し、その背景を考察することができる。

展開

時配	生徒の活動内容・学習内容	指導上の留意点(◇)、評価(☆)	資料等
3分全	1. 前時の復習をする。	◇ 時代によって、妖怪の捉え方が異なることを復習する。	
2分全	2. 学習問題を知る。 あなたにとって、妖怪とはどのような存在?		ワークシート
2分全	3. アマビエの動画(前半部分)を視聴する。 https://youtu.be/KcOVD80S3Hw	◇ アマビエとはどのような妖怪か、その概要を掴ませる。	アマビエの動画資料
10分全	4. アマビエがなぜキャラクター化されたのかを、周りの人と考える。 ・怖いのが嫌だったから。 ・可愛くすると、人気が出るから。	◇ 社会の変化に応じて、妖怪の姿も変化していることを抑える。 ◇ 最低限、妖怪と社会が抑えることができれば良い。	ワークシート
3分全	5. アマビエの動画(後半部分)を視聴する。	◇ アマビエチャレンジを通して、現代での妖怪の扱われ方を知る。	アマビエの動画資料

10分全	6. 妖怪はどのような存在か、またそれはなぜか、を個人で考える。 ・アニメのキャラクターのような存在 ・何か納得できないことがあった時、説明する為に用いる都合の良い存在	◇ できるだけ多様な意見を発表させ、個人によって妖怪の捉え方やその背景が異なることを理解させる。	ワークシート
5分全	7. 学習問題に対するまとめを考える。 妖怪は「人の心を写す鏡」のような存在である。社会の変化により、その社会に生きる人の心も変わり、生み出される妖怪の姿も変わる。		ワークシート
5分全	8. 出世の首 菅原別館の話聞き、動画を見る。	◇ 現代における妖怪への見方や考え方の多様性を理解させる。	菅原別館の写真、動画資料
5分全	9. 3時間の授業を通じた感想を書いてもらおう。		ワークシート

3. 板書計画

7/14(木)	あなたにとって、妖怪とはどのような存在? Q なぜアマビエは、可愛いキャラクターになった? ・怖いのが嫌だったから。 → 可愛くして、癒されたかった? ・可愛くすると、人気が出るから。 → 商売になる?	妖怪とはどのような存在か、 またそう考える理由について子どもの考えを書き出す。
---------	--	--

第6学年 社会科学習指導案

令和4年7月7日(木) 展開1時間目
千葉大学教育学部附属小学校 6年1組
授業者 土屋 雅

- 第1時 妖怪って何だろう?
- 目標
 - ・妖怪とそうでないものの違いを自分なりに捉えることができる。 <知識及び技能>
 - ・妖怪に対して興味・関心を持ち、妖怪がどのような存在であるかを考えている。

3. 展開

時配	児童の活動内容・学習内容	指導上の留意点(◇)、評価(☆)	資料等
導入20分全	1. 事前アンケートの結果を共有する。 ・あなたの知っている妖怪をすべて教えてください (Q1) ・あなたは妖怪と聞いてどんなイメージを持ちますか? (Q2) ・妖怪はどんな所に現れると思いますか? (Q3) ・妖怪はいつ現れると思いますか? (Q4) ・妖怪はいると思いますか? (Q5)	◇ アンケート結果はあくまで個人の意見であり正解はない旨を伝える。 ◇ できるだけ児童から自由な発言を引き出す。	パワーポイントにおける、ランキング・円グラフ等での結果の提示
展開18分全	2. 学習問題を知る。 妖怪って何だろう?		ワークシート
18分全	3. 妖怪とそうでないものの仕分け活動を行う。 ・アマビエ (①)・カッパ (②) ・悪魔 (③)・神様 (④) ・鬼 (⑤)・妖精 (⑥)	◇ この学習問題は三時間を通して考えてほしいものであり本時中に答えが出るものではない。 ◇ 仕分けやその理由に正解はないということを伝える。 ☆妖怪か否かの判断を自分なりに行	ワークシート

①~⑥を妖怪かそうでないかで仕分けし、その理由を書きだす(個人)	うことできる(知識・技能)	
・どのように妖怪か否かを仕分けしたか(妖怪の仕分け方、仕分けの根拠)を周りの人と確認、意見交換を行う。	◇ この時に自分の意見が変わってもよいということを伝える。	黒板に貼る妖怪たちのイラスト
・どのように妖怪かそうでないかの仕分けを行ったのかと、その理由をクラスで共有する。	☆ 周りの人の意見を取り入れながら自身の妖怪観と向き合うことができる(主体的に学習に取り組む態度) ☆ 興味・関心を持ち妖怪がどのような存在であるかを考えることができる。(思考力・判断力・表現力等)	
4. 本時のまとめを行う。 ・今回の授業を通して改めて自分にとって妖怪とはどのようなものであるかを考え、書き記す。		ワークシート
5. 次時以降について知る。	◇ 昔の人々と妖怪について学習することを伝える。	

4. 板書計画

7月7日(木)			
妖怪って何だろう?			
○これは妖怪? 妖怪じゃない?			
妖怪		妖怪じゃない	
番号	理由	番号	理由
事前アンケート結果			
Q2			
Q3			
Q4			

第6学年 社会科学習指導案

令和3年7月13日(水) 展開2時間目
 千葉大学教育学部附属小学校 6年1組
 授業者 大川 遼馬

1. 第2時 昔の人にとって妖怪はどのようなものだろう？

2. 目標

- ・江戸以前と江戸以後の妖怪観の変化を理解することができる。＜知識及び技能＞
- ・昔の人が妖怪をどのように見ていたかを考えている。＜思考力・判断力・表現力等＞
- ・昔の人にとって妖怪はどのような存在かを理解しようとしている。＜学びに向かう力・人間性等＞

展開

時配	児童の活動内容・学習内容	指導上の留意点(◇), 評価(☆)	資料等
3分全	1. 前時の復習をする。	◇妖怪の仕分けが人それぞれであり、理由も様々だったことを共有する。	パワーポイント
2分全	2. 学習問題を知る。 昔の人にとって妖怪はどのようなものだろう？		ワークシート
7分全	3. 今昔物語集を読んで、1000年前の人が妖怪をどのように捉えていたか考える。 ・怖い存在 ・人に危害を加える存在 ・噂で広がっている	◇妖怪が怖い存在であったことを捉えさせる。 ◇人のうわさによって妖怪が怖い存在であることが伝えられていることを捉えさせる。	ワークシート 資料(今昔物語集の漫画のコマ①、②、③)
6分全	4. 当時の人は超自然的なものを合理的に考えていたことを知る。	◇昔の人は自分たちが理解できないことを合理的に考え、納得していたことを説明する。	資料(北野天神縁起絵巻④)
7分全	5. かるたと歌舞伎が300年前の人にとって何をするためのものか考えよう。 ・娯楽の対象であった。 ・江戸の人に楽しまれていた。 ・遊びの道具に使われた。	◇妖怪が歌舞伎の演目や浮世絵の題材に扱われるなど、親しまれ、娯楽の対象になっていったことを考えさせる。補足説明として浮世絵を用いる。 ◇妖怪は娯楽の対象になっていったことを説明する。	ワークシート 資料(かるた⑤、歌舞伎⑥、浮世絵⑦)

10分全	6. 妖怪を楽しむものになった背景を考える。 ・生活に余裕が生まれた。 ・世の中が平和になった。 ・分からないことが少なくなった。	◇社会の変化により、妖怪に対する捉え方が変化したことを捉えさせる。 ◇社会が平和になり、人々に心の余裕が出てきたことを考えさせる。	ワークシート 資料(時代の特徴の比較表⑧)
2分全	7. 新たに生み出された妖怪を知る。	◇アマビエがどのように生まれたのかを説明する。 ◇現在の鬼の姿は江戸時代に作られたものと説明する。	資料(江戸以前の鬼⑨、江戸以後の鬼⑩、現代の鬼⑪、江戸のアマビエ⑫、現代のアマビエ⑬)
6分全	8. 学習問題に対するまとめを考える。	◇社会的な背景と一緒に変化をまとめさせる。	
2分全	9. 次時について知る。	◇次時は、現代の捉え方を考えていくことを伝える。 ☆各時代の妖怪の捉え方を理解することができる。(知識・技能) ☆各時代の妖怪の捉え方を考え、表現することができる。(思考力・判断力・表現力等) ☆昔の人にとって妖怪がどのような存在だったかを理解しようとした。(学びに向かう力・人間性等)	

3. 板書計画

7/13(水) 昔の人にとって妖怪はどのようなものだろう	<今からおよそ300年前> ○この2つは当時の人にとって何をするためのものだろう ・娯楽の対象であった。 ⇒楽しむものであった。 ・江戸の人に楽しまれていた。 ・遊びの道具に使われた。 ○どうしてこのように変化したのだろう ・生活に余裕が生まれた。 ・世の中が平和になった。 ・分からないことが少なくなった。
<今からおよそ1000年前> ○今昔物語集から分かること ・怖い存在 ⇒怖いものであった。 ・人に危害を加える存在 ・噂で広がっている	

7月13日(水) 2時間目ワークシート

年 組 番 名 前

学習問題

<今からおよそ1000年前>



○当時の人は妖怪をどのように捉えていたか今昔物語集から分かることを書こう

→

当時の人にとって妖怪は

であった。

その理由

その理由

<今からおよそ300年前>



○この2つは当時の人にとって何をするためのものだろう

→

当時の人にとって妖怪は

であった。

その理由

その理由

まとめ

まとめ

前回の復習 (多かった仕分けパターン)

妖怪じゃやない

① アマビエ ② かっぱ ③ 鬼 ④ 妖怪 ⑤ 妖怪

2時間目

7月13日 (水)

授業者: 大川 遼馬

学習問題

昔の人にとって妖怪はどのようなものだろう

前回の復習 (仕分けの理由)

妖怪

妖怪じゃやない

外国のもの

やさしい・人にいいことをする

楽しい・いたずらをする

怖い伝え・伝説

悪逆の生き物だから

○どうしてこのように変化したのだろう

「怖い」→「楽しむ (娛樂)」

今からおおよそ1000年前	今からおおよそ300年前
・お米があまり取れない	・お米がたくさん取れる
・腹いがない	・腹いがない
・暑気で亡くなるが多かった	・暑気で亡くなることが少ない
・学問が発展していない	・学問が発展し始めた
・分らないことが多い	・分らないことが少なくなった

○この二つは当時の人にとつて何をするためのものだろう

○当時の人は妖怪をどのように捉えていたか
今昔物語集から分かることを書こう

＜今からおおよそ1000年前＞

鬼

(今からおおよそ1000年前)

(現代)

○どうしてこのように変化したのだろう

- ・ 平和な時代になり人々に心の余裕が生まれた。
- ・ 病気や食料不足に悩まされることが少なくなり、生活にも余裕が生まれた。

＜今からおおよそ3000年前＞

○このように捉えていた理由

昔の人は自分たちの怖いものや分らないことを妖怪のせいにして、納得しようとしていた。

まとめ

分らないことが多く、社会が不安定な時は妖怪は怖いものであったが、社会が平和になって生活に余裕が出てくると楽しむものにもなった。

アマビエ

(今からおおよそ3000年前)

(現代)